る。

予は稍々詳細な半田鑛山に關する特別報告を書くことを望んでゐる。併し今は此の短い記述に止める。（未完）

伊太利ところ〴〵（十二）

瀧川規一

『ポムペイの建築物の年代（一）』　英國の小說家リットン卿がその著はす處の歷史小說によつてポムペイの死人の都を提へて生きたる都を讀者の眼前に展開せんと欲したのは今日からは既に百年に近き昔である。死都の現實を見、その種々なる方面を如實に理解してはじめて小說の記事が生きて來る。小說家として苦心は未だ死都を訪れざる讀者に恰も訪れたるが如く凡てを理解せしめなければならぬことにある。リットン卿は死都の地理的歷史的說明を加へて猶且つ小說としての筋の運びをよくし、事件の興味を促進せしめんと欲したのである。然しながら斯る筆法は既に蘇格蘭の大小說家サア・ウオータ・スコットが幾多の歷史小說に於て既に試み或は成功し或は失敗に終つてゐる。リットン卿も亦スコットの筆法を範とし死都ポムペイの最後の日を描かんとしたのである。彼の小說を讀んだ時吾々は些か理解に難澁を感ぜぬではない。それは主として地理的歷史的說明の部分である今日死都の片隅を歷訪せんと欲する者にとつても同じく難澁を感ずるのは亦この點である。專門の案內者も亦精確なる豫備知識を有しない。羅馬で傾聽したタニ敎授の史蹟案內の實地講演の如き學者的精確さを期待するのは抑も

無理な注文である。細部に亘つては訪客自らが自らを案内する覺悟を持たなければならぬ前節に於て現筆者が小説ポムペイの最後の日と共に筆者自らを再び案内せんと云つたのはそれが爲めである。

ポムペイに現存せる諸種の數多き建物を理解せんと欲するならばこれ等の建物が建造された四つの時期を知らねばならぬ。第一期は紀元前五世紀の前半である。建物の樣式は古代希臘のドリス(Doris)式である。この時期の建物は堅さうで軟かさうで火山國の石材としては些か不安な石材らしく見える石材で作られてゐる。專門家は石灰岩(サルノの石灰岩)、溶岩、凝灰岩などが水と混合して堅くなつてゐるから大丈夫で、日本の木造建築よりは堅固だと云ふ。ポムペイに就てはこの期の建造物は餘り多く殘存してゐない。案内されたものでは只僅かにドリア式の殿堂の石柱の殘物がある。太き石柱の短かきものの上に大なる平石が載つてゐる。奈良附近の寺院の燒け遺りの伽藍石に等しく餘りに無殘な遺物なるが故に旅客の眼を殊更に惹くのである。

第二期は紀元前五世紀及び四世紀のエツルーリア又はエトラスカン時代の政府の全盛期である。この時期にはポムペイの都市の街路は敷石を以て敷き詰められ、所謂街路建築なるものが完成した。

今日その敷石は車の轍の跡を殘して擦り減つてゐるのがそれである。この時期に於てはまた市の周圍の城壁が築かれ、市の出入口たる門が建てられた。この期に屬する民家としては醫者の家(Casa del chirugo)に案内される。家は僅かに一小部分のみを遺してゐるのであるが、家の正面はこの期の特徴として黄褐色の石灰岩で作られてゐる。屋内は無裝飾の石灰岩であり建築の骨組をなす石灰岩の石材の間隙は粘土で固められてゐる。これがこの期に屬する最古の民家であるとて案内者は得意顔である。

第三期は紀元前二〇〇年から八〇年に至る時期である。この期を稱して凝灰岩であるタフ材

によつて公私の建物が建設されてゐるが改にタフ期と呼ばれてゐる。この期に屬するものには顯著な建物が多い。第一にバシリカ(Basilika)がある。バシリカなる語は希臘語の Stoa basilika から由來し、王の會堂の意である。ポムペイに於けるバシリカは羅馬共和政府時代の最壯嚴なる建築物の一つである。兩側に立ち並ぶ多くの圓柱の遺物は往時の盛觀を忍ばしめるに充分である。最初はこの會堂内にて裁判をなした。今日の裁判所であつた。然し時には商取引をもなした。今日の取作所及び市場をも營んだ案内者はタフ凝灰岩の六本の圓柱の立ち並ぶ正面の入口に先づ案内する六本の圓柱の間には五つの戸口がある戸口を入れば入口の廣間に入る壁には化粧漆喰が僅に跡を留めてゐる。壁と圓柱との間に戸口がまた五つある。これを通つて四段の階段を上ると昔屋根のあつたらしい大きな廣間に入る。外の周圍には昔柱廊がありその柱は煉瓦製のアイオニア式の大圓柱が二十八本建てられてゐた廣間は奥行百九十八尺、間口八十六尺ばかりであると云はれてゐる。奥行の側には兩側に長短二列の圓柱がある。短き圓柱は太き圓柱であり長き圓柱は二本宛密接し短き圓柱の上に載るやうになつてゐたらしい。處々に壁が遺つてゐる。中央の廣間は今日から想像すると、架け渡しの屋根がついてゐて廣間の向ふには裁判席があり、二階であつたらしい。裁判席には二人の判事(Duoviri iuri dicundo)の席があつた。アイオニア式の圓柱の冠石が幾個か遺つてゐる。その昔三十尺ばかりの高さであつた二十八本の圓柱は痕跡のみしか殘つてゐない裁判席の下部にある圓天井の地下室は何の爲めに使用されたか判明しない。裁判席前には騎馬像の臺のみが殘つてゐる。これ等の遺物によつて往時を追懷し、その偉大なる建築物であつたことを知り、リットン卿がその小説に於て如何にこの建物を利用したかを知る時、吾々には地下埋沒の建物ではなくなる。

この期に屬する次の建物はアポロの神の殿堂である。基督教で神と云へば一も二もなく一神

教の神である。有體の神は基督それ自身でなければ聖母マリアである。舊教國に旅すると數多き教會寺院の献奉されてゐるのは基督及びマドンナでなければ幾多の聖徒殉教者修業僧である。これ等の聖徒殉教者は今日では八百萬の神の如く神界を賑やかにしてゐる。斯る零圍氣にあつて、多神教のアポロの殿堂跡を訪れる。學問の復活及び文藝復興の時代に於て古代希臘及び羅馬に人々が興味を感じた。それと等しき新鮮味をアポロ殿堂を見て感ずるのである。一神教多神教の是非曲直は神學者にとつて重大ではあらうが、凡庸人の小さき信仰には信仰の對照物さへあらば事足りる。アポロの神殿に向つて古代人の抱いた敬虔の念に共鳴する。

抑もアポロの神は今更云ふ迄もなく光の神である。最上の神ジユピタ(ジユース)とラトナの二柱の神の間に生まれた男神であり、同腹の女神としては月の神であるダイアナが居る。光の神たる以上アポロの神敵は暗黒であり不純であり禍害である。これ等の神敵は光の神に征服されなければならぬ。アポロの神は自然死を司り復讐を司る。從つて人間と野獣とに疾病と死と破壞とを送る。時にはこれ等の凶物を豫防して呉れる。また豫言をも司つてゐる。從つて豫言をする爲めに宣托をなす。托宣を命じられその才能を授けられた僧尼がある。粹な處ではアポロの神は音樂の神であり詩の神である。キサラ(Kithara)又はフォルミンクス(Phorminx)と古代希臘に於て稱せられた琴を奏して諸神を興饗する。從つて春日明神には神鹿があり、男山の八幡さんには弓矢があると云つた樣に、アポロの神には上述の樂器、その他弓矢及び胡籙、桂の花冠、青銅の三脚臺(神托用の)、地球の中心點たるオンファロス(Omphalos)、狼、雌鹿、白鳥がある。何と數多い所謂神樣のお使物である。日本の神社ならば十數社の神樣のお使物を一柱の神で集めてござる。神德の數多きを悦ぶ氣持になれば、たとへこれ等の屬性が矛盾しようとも多々益々有難味を增すのである。

現存のアポロの神殿は只その昔の圓柱の三四

が完全に保存されてゐるのみであつてその他は基部を殘せるのみである。史の傳ふる處によれば羅馬以前に建立され紀元後六三年の地震に再建され最后の地震に埋沒されたのである。再建當時の時代的趣味から云へば建物の全部が化粧漆喰が塗られてゐたらしい。また位置はフォラム(Forum)の公會所の前にあつたらしい。一方には裁判所のバシリカがあり、相接してフォラムの圓柱列があり、更に接してアポロの殿堂がある。往時の壯觀が想ひやられる。昔の建物は殿堂の正面にはトラヴァタイン(Travertine)と科學的に呼ばれる鐘乳石樣の石材で作られた祭壇がある。殿堂の階段前には神火が燃えてゐた。火焔は今日消えて冷たき臺は依然として殘つてゐる。この火を圍んで神舞をなす眞裸若くは白衣の處女の群が居た。清淨無垢の處女の一人が神の托宣によつて神の生贄となる。親戚故舊の涙の裡にあたら蒼の花は敢へなく散り去る。古典悲劇の極致は神の托宣と神火とに現はれる。今日に於ては佛の首府にある凱旋門下に無名戰士の靈火がチリ〳〵青く燃えてゐる。瓦斯を送つて燃やしてゐるなどと云ふのは餘りに冒瀆である。各國貴顯の往訪者は必ず花輪を捧げる。この靈火とアポロ殿堂前の神火とは古代も今日も風習の變化なきことを敎へるのである。古典時代の悲劇も今日の文明白人國の悲劇もその殘酷さに於て相距ること遠からざるを覺える。尼港事件當時露人が二頭の馬に邦人の兩脚を縛りつけ馬に鞭うつて脚を裂いたと云はれる近代的殘虐、露皇室の皇女達が散髮屋や人夫の手にかかり無殘な最期をなされた悲話が若し眞實なりとせば、初代基督敎徒の互に行つた犧牲の凄慘もあながちアポロを崇拜する多神敎に責を負はす譯に行かぬ。斯る慘酷性は人種の血に流れた特異性であるとさへ思はれる。「若し日米戰はゞ」の日には彼等白人系のむごさの勃發せぬとは誰が保證し得ようぞ。アポロ神殿前の神火の冷き鉢臺を見て、白人文明の悲劇の慘を連想したのである。

神殿の兩側には門があつた。階段の左側には

日時計付きの圓柱があつた。階級を登れば最初の廣間である。基礎工事は三碼の高さである。周圍にはコリント式の二十八本の圓柱があつた。地下室にはモゼイックの美しい彩色の敷石があつた。敷石の正面の緣には點々孔を穿ちこれを塡めるに金屬を以てし、以て記銘の文字を綴つてゐる。この敷石の爲めに費やされた費額と出資者の姓名とを書いてある。左側の地下室には饅頭形の石がある。これが有名なオムフアロスである。陰陽石の陽石に似てゐる。案内者は出臍だと云つて獨り笑つてゐる。これが地球全體の中心點だと考へられた。アポロの神はこの石の上に御腰を卸ろし、手には楯と三股の權票とをもつてゐる。今日の奇才と稱せられるゼームス・ジョイス氏が現代の混濁の人生を叙したユーリセス中にオムフアロスを想起した。オムフアロスの字義は臍である。而して世界の中心點である。人體の中心點である。この中心點たる臍の英語を知らなくて、下宿の娘に腹の下の孔は何と云ふかと聞いたが爲めに、婦人侮辱の廉を以て下宿を追はれんとした大先輩がある。アポロのオムフアロスは種々連想を與へる。

圓柱の前列の處には右手にハーマフロダイト(Hermaphrodite)の大理石像があつた。この神は男神であるが、身體は見事な女體である。右手にはヴイナス(Venus)の像があつた。ヴイナスの前には祭壇がある。前面の兩角には右手にアポロの像、左手にダイアナの像がある。ダイアナの前には矢張り祭壇がある。女神の前にのみ祭壇がある。その幾多の立像があつた。今日ではこれを見るにはナポリの博物館に行かねばならぬ。

第三期に屬するもので面白いものは他に澤山ある。最も面白きは浴場である。古代羅馬人の足跡の印する處には必ず浴場がある。然かも地下から發堀されるか然らずんば廢墟として保存されてゐる。英國のバスの町にある浴場、倫敦市中にある羅馬浴場の如きはその一例である。羅馬にては規模廣大なる浴場跡がある。今ポムペイにもそれがある。今日から見れば一小都會

に過ぎないこのポムペイに幾多の大小浴場があつた。そのうちでも最古き最も大なるテルメ・スタビアネ(Terme Stabiane)がこの時期に屬するものとして述べるのである。

この浴場は紀元前二世紀に建てられその後幾多の改築があつた。この改築の記錄によつて察する時には今日吾邦の各地にある何々溫泉と稱するものは古代羅馬の考案以上に出たものがないと云つて可なりである。羅馬にある大浴場に匹適するものは勿論なからう。蒸氣によつて發汗せしめて溫浴する効果は今日のトルコ風呂の狙ふ處である。然るに乾燥した空氣によつて、發汗せしめて溫浴の効果を工夫した點は、軍艦の機關室以外に何人も未だに應用せざる處である。これがポムペイに於ては紀元六三年の地震後間もなく案出したのである。而かもこのスタビアン浴場がそれ(Loconium)を工夫したのである。浴槽に身を投ずる前に浴客の垢と脂肪とを洗ひ落す部屋(Destrictarium)をも工夫したのである。これは寧ろ經營者側の經濟的考案であつたであらう。その他壁畫に於て浴客の眼を慰め感官的刺戟を增す裝飾を施したのである。吾々は案内者に導かれてアボンダンツア街(豊滿街)から浴場跡に入つた。こゝは人通りの最も繁き町であり他の街路よりも一際目立つて廣く四つの柱跡によつて察するに凱旋門らしきものがあつた。

廣い玄關を入るとパレストラ(Palaestra)と稱せられる廣い運動競技場に入る。北、東、南の三方には圓柱列のあつた跡がある。凝灰石のドリック式の圓柱列がある。九柱戲(Skittle)をやる地盤らしい滑な灰色の凝灰岩を敷き詰めた處がある。九柱戲用の石球は發堀されてナポリの博物館にある。ナタシオ(Natatio)と呼ばれてゐる泳浴の廣き水槽がある。今日のプールそのまゝである。着衣を脱する室アポデテリアム(Apoditerium)があり、壁に掘りつけた衣服入れが幾つもある。大理石の洗面鉢樣の水溜がある。プールに入る前後に水をあびたものらしいこの洗面鉢やうな淺き水は一尺ばかりの深さで

あつた。こんなのが二つある。運動場の壁には美麗な構圖があつたらしい。今日見ても當時の意匠の卓越であつたことが判る。主人が入浴せる間に待つてゐる侍者の溜り所もある。丸天井のある室には美しき構圖のエロ繪がある。フリヂダリアム（Frigidarium）と呼ばれる冷水浴室がある。また生溫るの浴室（Tepidarium）がある。また熱湯浴のカルダリアム（Caldarium）と呼ばるるのがある。熱氣浴室が二つある。右側の熱湯浴室には湯の噴水する槽があり、水をかぶる槽もある。勿論起熱室はある。男女位置を異にするが夫々の種々の浴室がある。最初は女性は街路の入口からすつと浴室に入つて、入浴を終れば家に歸つたらしいが、後には浴後の溫き肉體美を裸出して運動競技をすると共に歡樂の極を味つたらしい。婦人の着衣箱として設けられた壁の穴が男子の脫衣箱の丁度下にある。これは後に作られたと云はれてゐる。火山爆發前の歡樂境たりしポムペイ市の人間の自然生活は今日のエロ、グロ以上であつたらしい。羅馬の大浴も亦エロ、グロ以上であつた。露國の性的共產狀態を想像すれば大過なからう。そんなことは本論ではないが、今日の所謂溫泉場の設備以上のものが既に紀元一世紀以前に出來上つてゐたことを想ふと實に驚くより外がないのである。

新著紹介

○桑原博士還曆記念東洋史論叢

弘文堂發行
定價十二圓

さきに小川博士の記念論文が出たが、同時に我東洋史の泰斗桑原隲藏博士還曆の記念にこの四六倍版一三六八頁といふ大論文叢が出た、欝然たること林の如しといふべきではないか、門下及友人の論文凡四十五篇、その中で人文又は歷史地理に關するものは左の如くである。

池内博士の始建の征東行省、岡崎文夫氏の六代帝邑考略、加藤繁氏の宋代の都市の發達、杉本直治郎氏林邑建國の始祖、飯島忠夫氏の木星紀年法、藤田元春氏の暹羅國行程及海路考、内藤雋輔氏の高麗風俗に及ぼせる蒙古の影響、白鳥庫吉氏の大秦傳に現はれた支那思想、有高巖氏の元代の農民生活、愚淵一氏の建州左衛地、那波利貞氏の唐の長安城、内藤博士の